

長期慢性疾患・終末期・退行性病変に対する摂食・嚥下リハビリテーションの現状 - 八王子言語聴覚士ネットワークアンケートから -

医療法人社団永生会 訪問看護ステーション めだか ○山本 徹 (ST)

医療法人社団永生会 南多摩病院 石山寿子 (ST)

【はじめに】

現在、言語聴覚士 (ST) には摂食嚥下リハビリに関わる専門職として、長期慢性疾患、終末期、退行性病変など、多くの機能的改善を求められない患者に対しても摂食嚥下リハビリの提供が求められている。しかし、そのような患者への摂食嚥下リハビリの提供指針として広く検討されたものは見当たらず、それぞれの ST がどのようなリハビリを提供しているのかといった情報を得て、検討する機会は少ない。そこで今回、八王子言語聴覚士ネットワーク (八王子 ST ネット: 会員 81 名 会員所属 31 施設) に所属する ST にアンケートを実施、長期慢性疾患や終末期、退行性病変患者に対する摂食嚥下リハビリテーションの現状と、ST として上記のような病態の患者に対し、どのような関わりをもっていきたいかについて聞いた。

【対象と方法】

調査は八王子 ST ネット会員を対象に行った。定例会開催時に質問紙を配布、会場で記入後、回収した。一部は所属施設に持ち帰り記入後、郵送してもらった。アンケートは無記名とし、①長期慢性疾患、終末期、退行性病変患者への摂食嚥下リハビリを行っているか、②介入の際の条件、③最重度の担当患者の意識レベルおよび④摂食・嚥下グレード、⑤介入する期間、⑥摂食嚥下リハビリ実施に重要だと思うことおよび⑦難しいと思うこと、⑧摂食嚥下リハビリの効果、⑨長期慢性疾患、終末期、退行性病変患者の摂食嚥下リハビリに関わりたいか、の項目について尋ねた。③④⑤では現状だけでなく、ST として、できれば関わりたいと思っているレベル、グレード、期間についても併せて質問した。

【結果】

アンケート回収数は 37 件。長期慢性疾患、終末期、退行性病変患者への摂食嚥下リハビリを実施していると答えた者は全体の 75% だった。介入の際には、意識清明といった、これまで言われてきた摂食嚥下リハビリ介入条件を特に設けていないとの回答が 43.5% と最も多かった。最重度の担当患者の意識レベルは JCSⅢ桁が 26.7%、摂食・嚥下グレード 1, 2 が 67.9% だった。現状の介入期間は看取りまでが 28.1% だったが、関わりたいと思っている期間では、看取りまでとした回答が 51.4% となり最も多かった。またリハビリ実施の際、重要なことおよび難しいことでは「連携」や「全身状態の管理」との回答が上位となった。提供するリハビリの効果については「効果あり」「何らかの効果あり」が 78% だった。長期慢性疾患、終末期、退行性病変患者の摂食・嚥下リハビリに「ぜひ関わりたい」「必要があれば関わりたい」とした回答が 94% だった。

【考察】

当地域の ST がそれぞれの施設で長期慢性疾患、終末期、退行性病変患者の摂食嚥下リハビリに関わり、より重度の障害がある人にも関わっていくことを望んでいる一方、全身状態を見据えた予後予測や連携に難しさを感じている現状が示された。それぞれの ST が直面する現状を踏まえ、何らかのリハビリ提供指針を検討していく必要がある。